

シュライアマハーと宗教多元主義

川島堅二（恵泉女学園大学）

はじめに

1. 宗教多元主義関連文献におけるシュライアマハー
2. 宗教本質論的多元主義とシュライアマハーの宗教論
3. シュライアマハーの言語論とリンドベック「文化 - 言語型アプローチ」

おわりに

はじめに

従来、宗教多元主義の文脈でシュライアマハー（以下シュ）が引用される場合は、J.ヒックに代表される宗教本質論的多元主義、あるいは G.A.リンドベックによる教理類型の「体験 - 表出モデル」の先駆としてがほとんどであった。シュの宗教論を、ルドルフ・オットーが『聖なるもの』で行ったような方向で解釈するとき、そのような位置付けは妥当であると思われる。

この発題では、まず宗教多元主義関連文献における上記のようなシュの引用を確認したうえで、彼の宗教論を宗教本質論的多元主義に解することの妥当性を問い、さらに、シュの宗教論以外の業績、特に彼の言語論が展開されている弁証法講義、神学通論、翻訳論等に注目することにより、むしろリンドベックの類型論における「文化 - 言語型アプローチ」および J.B.カブの「根本的多元主義」に親和性があることを示したい。

1. 宗教多元主義関連文献におけるシュライアマハー

宗教多元主義あるいは宗教間対話についての神学的議論の文脈でシュが引用される典型的な事例を以下に引用する。（傍点太字は発表者による）

ラングドン・ギルキー「多元性とその神学的意味」¹

「シュによって始められ、ティリッヒやたいていの自由主義的正統主義的神学によって継続されてきたもので」「一方では一般啓示の広い理解を提示する」「そのような理解によって他宗教（文化）に明らかな真理と恩寵とが、神学的に解明されうる」「他方ではある形での普遍的救済を提示することである。それによって他の宗教の道の妥当性が肯定される」

¹ J.ヒック＋ポール・ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて』春秋社 1993 年 p.91

G.A.リンドベック『教理の本質』²

「カントによる神概念の矮小化は、シュに始まり、私が「体験 - 表出モデル」と呼ぶものによって回復された。・ ・ シュの場合には、すべての宗教の根源は「絶対依存の感情」にあるとされたことが思いだされる。・ ・ 根本的宗教体験を記述する方法はほんとうにたくさんあり、それぞれが重要・ ・ 影響力の大きいものを並べてみると、シュからオットーを経由してミルチャ・エリアーデとつながり、その後も延々と続く系譜がえがける。・ ・ この伝統に属する思想家にはみな共通点がある。まず、最終的に宗教にとって重要であるものとの究極的に意義のある接触を、自己の前内省的な体験の深みにおこうとする姿勢があげられる」

J.B.カブ Jr.『対話を超えて』³

「(シュは) われわれは宗教的アプリオリ、すなわち、宗教的なものを他のすべてのものから区別する、人間経験内の普遍的要素を確認すべきであると提言した。かれの提言は、これは絶対依存の感情であるというもの・ ・ かれ以後の思想家たちは、聖なるものの感覚、究極的関心、超越的なものへの関係に焦点をしばることの方をむしろ好んだが、このような変化は根本的な範型をかえるものではない」

「キリスト教徒たちは概して、宗教的アプリオリは、そのもっとも純粹でもっとも適切な表現をキリスト教に持つということを見出す点で、シュに従った」

「一般啓示」「普遍的救済」「すべての宗教の根源」「宗教的アプリオリ」「人間経験内の普遍的要素」等々が表しているように、諸宗教に共通する普遍的本質を明らかにすることにシュの宗教論の意義をみており、ここから本質論的宗教多元主義の系譜の祖（の一人）とされるのである。

2. 宗教本質論的多元主義とシュライアマハーの宗教論

シュの宗教論の眼目は、はたして宗教の普遍的本質を明らかにすることなのだろうか。以下に、彼の『宗教論』において宗教の本質規定に関わる言辞を検討してみる。（以下はすべて『宗教論』初版（1799）から。〈 〉は原文の頁数）

Ihr Wesen ist weder Denken noch Handeln, sondern Anschauung und Gefuehl. Anschauen will sie das Universum, *in seinen eigenen Darstellungen und Handlungen* will sie es andaechtig belauschen, *von seinen unmittelbaren Einflussen* will sie sich in kindlicher

² G.A.リンドベック『教理の本質 - ポストリベラル時代の宗教と神学』ヨルダン社 2003 年 p.35

³ J.B.カブ Jr.『対話を超えて - キリスト教と仏教の相互変革の展望』行路社 1985 年 p.38f.

Passivitaet ergreifen und erfuellen lassen. 〈50f.〉

「宗教の本質は思惟でも行為でもなく、直観と感情である。万有を直観しようとするのだが、宗教は万有の固有な表現や行為によって、万有に恭しく聴き入り、幼子のような受動的態度で万有の直接的影響に捉えられ、満たされようとする」

Religion ist Sinn und *Geschmak fuers Unendliche*. 〈53〉

「宗教とは、無限なるものを感じ味わうこと」

ein *Individuum der Religion*, wie wir es suchen, kann nicht anders zu Stande gebracht werden, als dadurch, dass *irgend eine einzelne Anschauung des Universum aus freier Willkuehr* [...] zum Centralpunkt der ganzen Religion gemacht, und Alles darin auf sie bezogen wird. 〈259〉

私たちが求めている宗教の個性が実現するのは、次のことを通してしかあり得ない。すなわち、万有のもつある個別の直観が、自由気ままにその宗教全体の中心点となり、すべてが、その直観に関連付けられることによってである。

Dadurch kommt auf einmal ein bestimmter Geist und ein gemeinschaftlicher Charakter in das Ganze; Alles wird fixirt was vorher vieldeutig und unbestimmt war. 〈260〉

これによって特定の精神、共同の性格が全体にもたらされ、それまであいまいで定かでなかったすべてが確かなものとなる。

Jede solche Gestaltung der Religion, wo in Beziehung auf eine Centralanschauung Alles gesehen und gefuehlt wird, wo und wie sie sich auch bilde und welches immer diese vorgezogene Anschauung sei, ist *eine eigene Religion*. 〈260〉

ある一つの中心直観に関係付けられてすべてが見られ感じられるような、宗教の成り立ちはすべて - どこでどのようにその直観が形作られようとも、どれがこの選ばれた直観になろうとも - それは一つの独自の宗教である。

in Beziehung auf das Ganze *eine Haeresis* [...] weil *etwas hoechst willkuehrliches* die Ursache ihrer Entstehung ist. 〈260-261〉

全体との関係において、これは一つの異端である。その成り立ちの原因は、最高度に恣意的な何かなのだから。

“Wesen”(本質)、“Universum”(万有/宇宙/普遍)といった言葉に惑わされてはならない。宗教の規定に関わるシュの主張のポイントは、そうした普遍/万有が宗教において姿を現すのは、味覚(schmecken)の対象にさえ例えられるような個別独自の具体性においてということであり、それが前反省的(アプリオリ)なものであれ、経験的心情的なものであれ、諸

宗教の共通項の解明にシュの関心があったわけではないのである。

本質論的な宗教多元主義の泰斗 J. ヒックが好んで用いる用語に「究極的實在」「偉大な宗教の伝統」というのがある⁴。彼によれば、「人間は宗教生活によって究極的實在と関わり」、そのときには「人間存在が自己中心性から神あるいは實在中心性へと変容されることが起きている」。また「聖人とは、自己中心性から實在中心性への変容を実現することにおいて、私たちのたいていの者よりも先んじている人物のこと」であり「偉大な宗教的伝統はすべて・・およそ同じ程度にこの変容を促している」。「キリスト教の中には、あらゆる偉大な世界宗教に優ってすべての人が望むような人類の変容を実現させるための大きな力があるとは断言できない」。

このようなキリスト教以外の「偉大な世界宗教」が持つ救済力も等しく評価する自らの多元主義神学を、ヒックはシュの系譜に属すると自認するのであるが、これが先に一瞥したシュの宗教論の主張と同じ系譜と言えるかどうかははなはだ疑問である。シュは自らの宗教の本質規定に「偉大な伝統」などという枕詞を付さなかった。むしろ宗教が個別具体化する時の根本直観は「自由気まま」な「最高度に恣意的ななにか」「異端」とさえ表現されたのである。

3. シュライアマハーの言語論とリンドベック「文化 - 言語型アプローチ」

シュが生きた 18 世紀末から 19 世紀の神学には、今日のような意味での宗教多元主義や宗教間対話は主題として存在していないのであるから、シュと宗教多元主義というテーマ設定自体が無意味なことなのかもしれない。しかし、ヒックを代表とする本質論的な多元主義の神学的由緒を弁明する文脈でしばしばシュが引き合いに出されるので、その妥当性を検討しておくのもいくばくかの意味はあるかと思って展開したのが、前節までの議論である。そして、シュの宗教論の主旨は、宗教本質論的多元主義の文脈とは必ずしもかみ合うものではないということがわかった。

仮にシュを現在の宗教多元主義の議論に絡ませることを求めるなら、宗教論ではなく、弁証法講義、神学通論、翻訳論等で展開されている言語論に注目してはどうかというのが、この発題のもう一つの問題提起である。

瀧井はシュの翻訳論から彼の言語観を以下のように要約する⁵。「発話者は言語に対して二重の関係の中にある」。一方で人は、諸概念の内容やその結び付き、その限界といったあら

⁴ 以下のヒックの言辭の引用は前掲『キリスト教の絶対性を超えて』 p.53ff.

⁵ 以下、シュの言語観に関わる部分は瀧井美保子「シュライアマハーの翻訳論・司会報告 - 『異質性』によって開花する『固有の力』 - 」『シェリング年報』'10 第 18 号 (2010) p.109 以下に依拠。

ゆる要素において、常に言語から働きかけを受け誘導されている。しかし、人は他方、個々人の生き生きとした力が言語という形成可能な素材に働きかけて、これまでには存在しなかった新たなものを生み出し、言語を形成するという面をあわせ持つ。言語はこの両者、すなわち言語の精神と、発話者の精神との絶え間ない相互作用の結晶である。あらゆる個々の言説（作品）のみならず、言語それ自体をもこのような歴史的形成物であると捉えるこの言語観には、次のような根本的主張が含まれている。すなわち、異なる二つの言語間において、すべての要素が完全に対応しているということはあり得ない。どの言語にも他の言語では表現できない「非合理的 irrational」要素が存在する。このような主張の背景にあるのは、ドイツ語的な言語文化に対するシュの次のような認識である。異質なものと触れ合うことでドイツ語自体が豊かになってきた経緯、さまざまな異国の植物が移植されたことで、北方の大地が豊かなものとなり、気候風土が優美なものになったのと同じように、「私たちの言語は、異質なものとさまざまに触れ合うことによつてのみ、正に生き生きと成長し、固有の力(ihre eigene Kraft)を十全に展開することができる」（という認識である）。

このような個別言語の持つ「非合理性」については、弁証法講義でも『神学通論』でも言及される。

弁証法講義序論（1833 年）から引用⁶。

「弁証法は、一つの同じ姿で普遍的に通用可能なものではない。そうではなく、まず一つの特定の言語圏のために樹立されなければならない」。というのは、個別言語にはすべて「他の言語にとっては非合理であるような要素が存在する。それは、それらの言語の複数の要素を結び付けることによって厳密に再現できないもの」だからである。「あらゆる時代に通用し、空間的にもいたるところに広まり、そして、すべての言語において認められるような叙述を与えること」、「私たちはそのような普遍妥当性を断念する」。

『神学通論』（1811 年版・加藤/深井訳）から引用

§ 16 「どのような言葉も、原語によるよりも完全に理解されることはない。もっとも完全な翻訳であっても、原語の非合理性を解消することはできない」

『神学通論』（1830 年版・加藤/深井訳）から引用

§ 126 「いかに卓越せる翻訳といえども、原語の持つ非合理性を止揚することはできない。・ ・ ・ここで非合理性というとき、それは、ある言語の質料的要素も、形式的要素も、完全に他の言語のそれに移すことはできないという、あの周知のことを意味している」。

以上の引用箇所「言語」を「宗教」と置き換えるとき、先に検討した『宗教論』の引用箇所とおなじトーンが聞こえてはこないであろうか。「言語」にも「宗教」にも、その個

⁶ Schleiermacher, F.D.E., Einleitung zur Dialektik(1833), Felix Meiner Verlag, 1988. S.126ff.

別な成り立ちにおいては、他のものに代え難い非合理的なもの、個性、独自性が含まれているという主張である。

以上のような考察から思いだされるのは、リンドベックの教理分析類型の中の「文化 - 言語型アプローチ」である。それによれば「宗教は言語ならびにそれと関連した生活形式と共通点があり、また文化とも類似性がある」⁷。リンドベックによれば、宗教は神話や物語で具体化され、荘厳に儀式化された包括的解釈図式であり、それは宇宙において何にもまして重要であると解釈されるものを確認したり、描写したりする目的で、また、この最も重要であるものに関係した行動や信念をふくむ生活全般を組織化する目的で使用されるという⁸。したがって、複数の宗教の教理の背後に何か共通の宗教的経験や本質を求めるといふようなことは問題にならず、むしろ、それぞれの宗教が持つ固有性、他の宗教にはない個性、違いこそが有意味とされる。

おわりに

以上のような考察から、結論として言えることは次のことである。諸宗教にあてはめて、それらを判定できるような宗教の本質を求めるといふ意味での本質論的宗教多元主義の系譜にシュを位置づけることは適当ではない。むしろ、シュの宗教論その他の業績が共鳴するのは、リンドベックの「文化 - 言語型アプローチ」や、カブの主張する「根本的多元主義」である。曰く「宗教のプラトンのようなアイデアは存在しない。宗教が本当のところ何であるかという議論は無意味。宗教などというものは本当には存在しない。あるのはただ、伝統、運動、共同体、人々、信条、実践などであって、これらは多くの人々が宗教という言葉で意味するところのものと関連付けられている諸特性である」⁹。

かく言うカブにとって宗教多元主義に意味があるとしたら、それは他宗教との出会いによって「他者が自覚・実現した異質の諸真理を自己自身の中へと摂取する」ことにより「創造的自己変革」を遂げることであるという¹⁰。このような主張は、先にシュの翻訳論で確認した「異質性によって開花する固有の力」に呼応するものと言えるのではないだろうか。

⁷ リンドベック前掲書 p.28

⁸ 同上書 p.53f.

⁹ G.デコスタ編『キリスト教は他宗教をどう考えるか - ポスト多元主義の宗教と神学』教文館 1997年 p.124

¹⁰ J.B.カブ Jr.『対話を超えて - キリスト教と仏教の相互変革の展望』行路社 1985年 p.251